のホテルに引きうつツて、自分一人が此ホテルに滞在する、藤島佐藤の両君は、フハーシーに」引き移ったという簡単な記述があるのみである。

④ 第一回彫塑展覧会

彫塑会が明治三十五年五月の第三回展を最後に立ち消えとなったあと、彫刻科の卒業生たちは彫塑同志会や三四会に加わって研究を続け、東京彫工会、日本美術協会の旧風に対抗する姿勢を示した。

彫塑同志会は在京の本校彫刻科卒業生による組織で、前出の「研究会」（本書72頁記事参照）はこれに当たると考えられる。結成は明治三十六年九月頃と思われ、隔月に常会を開き、毎回課題と作者を決め、作品を持ち寄って合評した。例えば第三回常会の模様は次の如くであった。

○彫塑同志會　東京美術學校彫刻科卒業生中の在京者の組織せる同會ハ第三回常會を去三十日午後上野公園内東花亭にて開きたり　當日出品の重なる者ハ長愛之氏の寒さ（薄肉）山本筍一氏の寒さ（胸像）紫野健作氏の平和（全体物）の諸作なり　次回の課題ハ「恐怖」にて抽籤の上製作者ハ中村直彦、渡邊長男、黒岩淡哉、遠藤忠雄、毛利教武、山崎和治[沾]、松原象雲、細谷三郎の八名と定まりたり

（明治三十七年二月一日『読売新聞』）

次に三四会は、明治三十一年頃山崎朝雲、海野美盛、新海竹太郎、米原雲海、沼田一雅らが結成した「あとう会」という研究グループがあり、これが同三十二年に三三会（会員が九名だったことによる）となり、同三十五年春に三四会へと発展したもので、「毎月十五日に例会を開き、毎回二種のテーマを決め、それぞれに三名ずつの作品を出品、会員相互で批評研究しあった。」（『山崎朝雲資料集』昭和六十二年。福岡市美術館協会）という。課題は「酔顔」「ハイカラ」（明治三十六年九月）、「寝顔」「死」（同年十月）、「風味」「活気」（同年十一月）、……「老翁」「ほおかむり」（同三十七年七月）等々が出題されている。岡倉覚三校長時代の遂初会と似通ったかたちで活動を続けていたらしい。また、上記の彫塑同志会の活動形体もこれとよく似ている。三四会は木彫界の革新派が中心となって起こした団体で、洋風写実主義彫刻法を採り入れて革新を試みていた。会員は多く、本校彫刻科卒業生の中にも本山白雲、渡辺長男、山崎和沾、本保義太郎、長愛之、細谷三郎、黒岩淡哉、山本筍一、水谷鉄也等は同会に加わっていた。また、卒業生の中には三四会と彫塑同志会の両方に参加している者も少なくなかった。

明治三十八年五月に至り、彫刻科卒業生による彫塑同窓会が主催する第一回彫塑展覧会が上野公園旧五号館で開催された。旧彫塑会メンバーが中心となって開催したものであるが、明治三十七年十二月九日付『読売新聞』に「彫塑展覧会　白井雨山氏主となり同展覧会を来春上野五号館にて開会すべしと」という予告が載っているところをみると、新帰朝の雨山が尽力したことが考えられる。

この展覧会について『東京美術学校校友会月報』第三巻第八号は次のように伝えている。

○彫塑同窓會の展覽會　五月一日より廿八日迄上野五號館に於て開かれたり。同會は東京美術學校出身者より成るものにして、其主旨とする所は、我邦の彫刻は繪畫其他の美術に比して、進歩の蹟少く、著しく時世に後るゝものあるを以て、大に其發達研究を圖らんとするに在る由にして、斯道のため寔に賀すべきなり。さはいへ玆に大打擊を蒙りたるは、展覽會毎に起る所の裸躰問題なり。要するに彫刻の研究は比較的人物を主とするが故に、從て骨格筋肉を表顯すべき裸躰をも作らざるべからず、此會にても是等の種類尠からざるを以て、其の筋にては是等作品の出陳を不可なりとして命令を下したりければ、あはれ右名作の參考品、會員の新作品も全裸半身の別なく、婦人の像はあえなくも小暗き特別室に押籠めの悲運に會しぬ。裝飾店の舗頭にも裸美人像の悠然として腰打懸くるものある世の中に、純正美術研究の此會にかゝる禍の天下りたるは、氣の毒といふべくして、此は大に當局者の一考を乞ひたきものなり。今同會出品の作品中にして主なるものを擧ぐれば左の如し。

落人、水谷鐵也○時宗乾漆像、白井雨山○嫦娥　黑岩淡哉○ライオン、細谷三郎○薄命兒、高村光太郎○花見、物思ひ、毛利敎武○出陣、渡邊長男　合作の部にて突擊（和田、相場、高橋、小柴）○ライオン（朝倉、小林）勝利神（服部、畑、田中、川上）

また、『美術新報』第四巻第四号（同年五月五日）、同第五号（同年同月二十日）はそれぞれ次のように報じている。

○第一回彫塑展覽會

（五月一日より二十八日迄、上野五號館北部に於て）

美術學校彫刻科卒業生の彫塑同窓會の催にかゝる同會は、去一日より開會せしが、場中出品の重なるものは裸體にして、開會後警官の臨檢の際特別室陳列の外之を許されざることゝなりしより、特別室に陳列せるが、之が爲新作中の苦心により成れる重なる作を一般公衆に示すを得ず、同會員いづれも大に遺憾とし、かくては今後の開會に大影響あり或は同會の前途に望みなきことゝもなる可しと、今後の進行に付、目下苦心中なりといふ。其出品總數二百餘點、其重なるもの左の如し。

川上　邦世作　猿
小倉宏一郎（右）作　勝利
竹内　友樹作　スケッチ
朝倉　文夫作　ほつれ毛、老婆、陸海將校　肖像額面十數點
毛利　敎武作　おほなみ、愁思
本山　白雲作　肖像（榎本子、澁澤男）
杉本　傳作　美人
細谷　三郎作　かりうど
白井　雨山作　北條時宗、薄肉肖像、乾漆羅漢、同老子

……

石川　成錄作　盲女（卒業製作）
後藤　良作　老婆（同）
田口　幸三作　農夫（同）

……

美術學校在校生合作　勝利神像、ライオン、水兵

特別室

田中　親光作　婦人
竹内　定吉作　婦人、同モデル習作、男モデル習作
高村光太郎作　薄命兒　玉のり
深見　宏三作　女水鏡
川上　邦世作　男裸體
田嶼　珪三作　子供
畑　正吉作　古代女神像
水谷　佳園作　おちうど、恍惚
白井　雨山作　水汲

參考品

ヴイナス三點、エスクラーブ、アッシール、寫眞ラオコン、同シケランジュ其他寫眞數種

○第一回彫塑展覽會　其後特別室より『薄命兒』許されて普通品の中に陳列さるゝことゝなり、朝倉文夫、小林和三郎合作薫風（獅子）、小野六郎、松田茂合作太平洋水深幾尋（水夫）、數氏合作女神像等の大作出陳せられ、大に作品には活氣見ゆれど、會員は裸體陳列の不認可にて大に頓挫を來したりとのことにて、二十八日迄開會、二十九日中に閉會の手續を終ふ可しと。

このように、出品数二〇〇点を上まわる展覧会で、裸体モデルによる塑造研究の成果を示すものであったが、警察当局による裸体取締りの措置が極めて厳しく、折角の成果も一般に公開できない有様で、出品者の失望は大きかった。裸体彫刻を特別陳列室に展示するという措置は明治四十年文展開設後も続いたため、白井雨山などは次のように述べて取締りの緩和を訴えたが改善されず、大正六年第十二回文展に至るまで警察当局の干渉が続いた。

裸體製作に制裁を加へらるゝといふ事は、吾等彫刻社會に取りては、最も適切に痛苦を感ずる所の打撃である。何となれば、吾等彫刻社會は、製作に資すべき材料の範圍極めて狹隘にして、繪畫の樣に、自然界の森羅萬象、なんでも取て以て材料に供するといふ樣な自由な事は出來ぬ、それ故に吾等の仕事は唯人物を作るとか、動物を作るとかいふに過ぎぬのである。その人物も裸體ならでは充分製作の趣味を現はす事が出來ず。從て作家の深甚なる研究の程を示す事も出來ぬのである。極言すれば、裸體彫刻は吾等に取りては最も大切なる生命である、此れなくんば彫刻なしといふ程のものであるのである。それ故に政府の當局者は、吾等が此の狹き範圍内にてものしたる苦心の作をば、充分其意を諒察せられて、來るべき展覽會などには、なるべく寛大の取扱ひをせられん事を願ふのである。

（「第二回文部省美術展覧会批評」のうち「白井雨山君談」『太陽』第十四巻第十六号。明治四十一年十二月）

彫塑展覧会はその後も逐次開催の予定であったらしいが、実施された形跡はなく、文展という新しい活躍舞台ができるまで、青年彫刻家たちは再び地味な研究活動を続けてゆくことになったようである。

なお、『美術新報』第六巻第七号（明治四十年七月二十日）には「日

本彫塑会の意見書」という記事が載っている。東京美術学校彫刻科卒業生の団体である同会が第一回文展に於ける審査の公平を要望して文相牧野伸顕に意見書を提出（七月十五日）したという内容で、提出者に本山白雲、渡辺長男、細谷三郎、小倉右一郎、藤井浩祐、朝倉文夫、吉田政一、池田勇八、中村武平（「以下略す」とある。）の名が掲げられている。同会の活動については不明だが、同会はあるいは彫塑同窓会の後身かとも思われる。

⑤ チャカホイ節の流行

チャカホイ節の元祖は明治三十六年西洋画撰科卒業の渡辺亮輔であったと辻永が書いているが（128頁）、特に定まった歌詞もないこの七七七五調の唄は生徒に気に入られ、よく唄われるようになったらしい。大正元年九月十九～三十日の『毎日新聞』には明治三十八年入学の灰汁生なる人の「美術学校学生々活」が連載されており、その中に流行ぶりが次のように記されている。

△デカンショが一高を標榜する如く、チヤカホイ節は美術學校の學生々活一班を窺ふに尤も適當な歌で有る、彼は豪放此は洒落、兩者の對象（ママ）は明に兩校生徒の氣風の別るゝ所、敢てチヤカホイ節なる一項を設けた所以で有る、一躰チヤカホイ節は何處の國の產で、又誰によつて歌ひ出されて來たもので有るか、今定かに知る由も無い、何でも數年前日光へ旅行した時に、誰いふと無く歌ひ出したのが起原で有つたらうと覺える「この頃には起原も曖昧になつていたようだ。―編者註」、さうして其頃流行（はや）つた所の、有明節だの仙臺節だの乃至相馬節などを捨てゝ、皆が皆無意識に此歌を唄ひ初め、今では近所の藥學校を初め、遠く一高、赤門邊までチヤカホイ化されて居ると云ふ勢、

△由來美術學校には一定の校歌と云ふものが無い、從つて仲間の口にのぼるものは、他校の校歌か、夫とも其時々の流行唄（はやりうた）か、精々琵琶歌位に過ぎ無（なか）つた、中には長唄や清元に浮身をやつして居る通人も有つたが、未だ曾て美術學校特殊の天地を歌つたものとては遺憾ながら無かつたので、偶々チヤカホイ節の一部に歌はるゝや、我等の生活を現はすものは正に是れと云ふ風で、恰も闇夜に燈火（ともしび）を認めた如く、全校擧げて此歌に同化したのである、されば日頃より反目嫉視せる高襟（はいから）派も、蠻殼（ばんから）派も、一度チヤカホイの聲を聞く時は、議論も喧嘩も何處へやら、忽ち渾然と融和して、齊しく美の神の出現を仰ぐので有る

△節は必ずしも面白い節調で有るとは云ひ得ない、然乍ら其澁味の有る、暢然（のんびり）して、浮世を茶化したやうな所が、譯も無く美術學校の嗜好に投じたので有る事は今更云ふ迄も無い、今口を吐いて出る二三の歌を御披露申さう、好んで歌はるる文句は「何をくよ〳〵川端柳、水の流れを見て暮す」と言ふ誰でも知つて居る唄だが、

チヤカホイ所か今日此頃は、人の知らない苦勞する
此は試驗前だの製作前の苦しみを現はしたもので
チヤカホイ〳〵で半年やくらす、後の半年や寢て暮す

と云ふデカンショの替歌も有る、其旅行中次の宿屋へ着いた時は、先ず入口に立つて聲を揃へて

昨夕（ゆうべ）の宿屋は不都合な宿屋、呼んで出て來ず飯まづい